

中英語散文におけるワードペアとメタファー： 認知言語学的アプローチ

青木 繁博

Word Pairs and Metaphor in Middle English Prose: A Cognitive Linguistic Approach

Shigehiro Aoki

0. はじめに

本研究課題における「ワードペア」とは、andをはじめとする接続詞によって関連する2語が結び付けられたものを指す。現代英語におけるワードペア表現には「慣用句」「定型句」などの例も多いため、概して「特に意味はなく」「無用な」表現であるかのように説明されることが多いのが現状である。

本研究課題では、「死んだ表現」であるかのように言われてきたワードペアが、実際には英語の歴史を通じて常に新たな表現（新奇な表現）を生み出し続けているという、これまでに見過ごされてきた点に着目し、ワードペアを中心に据えた研究を進めることで、ワードペアの動機や他の諸表現にも共通する認知的基盤を明らかにするよう試みている。

1. これまでのワードペア研究に関して

1.1. ワードペアの主な先行研究

ワードペア(以下WP)の代表的な先行研究としては、中英語のWPを扱ったLeisiやKoskenniemi(1968)がまず挙げられる。WP全般の研究を見渡しても、他の時代区分に比べて中英語のWPを扱った先行研究が多いようである。このことは、中英語にはWPが頻出すること、WPの頻度が特に高いと言われる作品が存在すること、現代英語ではあまり用いられないタイプのWPも見られることなどに由来していると考えられる。日本における先行研究としても、Shibata、Yamaguchi、Kikuchi、渡辺、Shimogasa、谷、Katamiなど、個別の作品あるいは複数の作品に渡って見られるWPを対象に、中英語を中心として研究が進んでいる。

現代英語のWPを扱った先行研究の代表的なものとしては、GustafssonやMalkielなどが挙げられる。

1.2. ワードペアをめぐる一般的な見方と、それに対する反論

WPの2語の間にある意味関係は、類義語（または同意語、シノニム）だけでなく、反意語、同一カテゴリーに属する語など様々である。そのことは、上に挙げた先行研究を含む、主要な研究においては言及されているのだが、半面、多種多様な表現の一つとしてWPを取り上げたような研究では、類義語のペアにのみ重点が置かれてきたと思われる。

さらには、現代英語における「よく使われるWP」として、body and soul, bread and wine, night and day, to and fro, quick and dead, whole and soundなどを挙げることは決して難しいことではないが、こうした例にはいわゆる「廃語」が使われているものや、全体の意味が単語に還元できないものが含まれることが多い。そのため、概して「慣用的」あるいは「定型的」であるとして、その動機や意味構造については言及されず、かんたんな説明で済まされているのではないだろうか。

しかしながらWP研究において注意すべきは、決してすべてのWPが類義語からなるものでもなく、すべてのWPが慣用的でもない点である。確かに類義語のペアの数は多く、最も「主流」になるケースも多いが、反面、類義語でないペアもかなりまとまった数の用例が確認されることは、Koskenniemi (1975) や谷の研究によって明らかになっている。また、既存のペアが慣用的に使われるだけでなく、新しい組み合わせによるペア（新奇なペア）が常に生み出されている（生み出されてきた）ことは、英語の歴史を通じて観察されることである。

今後研究が進むにつれて、そのような「類義語でない」「新奇な」ペアは例外的・周辺的な事例だったと位置付けられることになるのかもしれないが、仮にそうだったとしても、現状としては、WP研究はそのような事例をも扱うことのできる理論的説明には至っていないと言わざるを得ない。

2. ワードペアとメタファーの関係

2.1. ワードペアに見られるメタファー

WPの中には、概念としてのメタファーに基づくと考えられる例が見られることがある。その点が今まであまり注目されてこなかったことの主たる理由は、上述の Leisi や Koskenniemi (1968) などの代表的な先行研究が、新しいメタファー研究が発展するよりも以前のものであったためと推測される。したがって、先行研究においてすでに分析されたと考えられている事例に対しても、新しいメタファー論の観点から検証することで、WPに関する新たな知見が得られるのではないかと考えられる。

2.2. 本研究におけるアプローチ

新しいメタファー論やレトリック論、カテゴリー論などをWPの研究に導入することによって、WPをめぐるこれまでの観点を整理すること、「例外的・周辺的な」事例をも含めたWP共通の基盤を探ること、WPの動機、機能、効果をより明確にすることが、本研究課題の目指すところである。

本論文ではその一環として、中英語散文における「WPとして用いられた概念としてのメタファー」の用例のうち、特徴的なものを選び、そこに新しいメタファー研究の観点からの考察を加える。それを通じて、WPとメタファーとの関係にはユニークなところがある反面、概念としてのメタファーが関与するという点においては、メタファー全般に共通する諸特徴（場合によっては諸問題）が反映されてい

ることを示していく。

なお、本論文で言及する WP は以下の作品から採ったものである：

The Cloud of Unknowing (以下 *Cloud*)

The Book of Privy Counselling (以下 *PC*)

The Book of Margery Kempe (以下 *MK*)

3. ワードペアに見られるメタファーの考察

3.1. 身体感覚に基づくメタファーとワードペア

- (1) this is to me gret *drede* and *hevynes* (*MK* Book II, 179 ほか)
 (2) Sche was than in gret *hevynes* and *diswer* (*MK* Book II, 264-265 ほか)
 (3) thei sped no wey and weryn *hevy* and *grutchyng* (*MK* Book II, 291-292)

以上は heavy または heaviness が drede (dread) などと並置され、「物理的に感じる重さ→心の重さ」として用いられた例である。中英語の語句に関していくつか補足すると、diswer は当該テキストの脚注に“doubt”とある。また grutchyng はおそらく grudging 「いやいやながら、不承不承の」といった意味であろう。

- (4) *hevy* and *sory* for dred of the wawys (*MK* Book II, 294)
 (5) *heuy* & *peynful* (*PC*, p.157 / l.14)

(4)は宗教的な中英語散文にはよく見られるペアの一例で、文脈によってはキリストの受難、すなわちキリストが背負わされたものを象徴的に表すといった心象に根ざしている可能性もある。また(5)については、(1)から(4)とは異なるテキストからの例であり、このように同様の基盤に基づく例が複数のテキストに渡って見られることは、こうした「WP - メタファー」表現の汎用性を示すものと考えられる。

- (6) meche mor *hy* and *holy* (*MK* Book II, 234)

(6)については「高さ→神聖さ」といった、上一下の位置関係を尊卑に置き換える発想に基づくものであり、基本的なメタファーの1つであると説明することもできるであろうが、身体感覚が「重力」を捉えたものと広く考えるならば、(1)から(5)の例との関連を指摘することも可能であろう。

3.2. 共感覚メタファーとワードペア

- (7) of thoo *sounes* and of thoo *swetnes* (*Cloud*, 1716 ほか)
 (8) *swetnes* and *counfortes* (*Cloud*, 1693 ほか)
 (9) so mech *swetnes* and *devocyon* (*MK* Book II, 363)

「甘い音」「sweet sound」といった表現は、安井、山梨、芳賀・子安（編）などで扱われている「共感覚メタファー」の典型的な例であるが、(7)の例はそれ自体がペアになったものである。また、共通の基盤に基づくと考えられる WP の例として、本来は sweet が形容しないはずの「慰め」や「信仰」とペアになった(8)(9)を挙げた。

芳賀・子安（編）に含まれる、楠見孝による「比喻理解の構造」（第3章）によると、共感覚メタファーの理解の基盤には「情緒・感覚的意味構造」の構造上の対応があるとされている。「快—不快」と「強—弱」の二次元の意味空間の構造と、共感覚的な形容詞の構造との間に共通性を見て取ることによって、比喻が理解されるということであろうか。

「快—不快」と「強—弱」に基づきつつ、さらにこれらのテキストがキリスト教の教義を扱うものである点を考慮すると、当該 WP の基盤にあるのは、「善—悪」（神に関することと、そうでないこと）と「甘い—苦い」との間に見て取れる共通性ではないかと考えられる。こういった二項対立的な構造が積み重なることによって、メタファーが理解されるとともに、(8)(9)のようなさらに高次の概念を表すペアが成立していると考えられるのではないだろうか。

なお、WP とメタファーとの関係において、上述のような二項対立的な構造が基になっていると考えられる根拠としては、「善—悪」「甘い—苦い」などの語自体がペアになった WP が広く使用されていることが挙げられる (*good or evil, sweet and bitter / bitter and sweet*)。そのような WP の使用を通じて（使用を基盤として）、概念が固まっていったという面もあるのではないだろうか。

今回は sweet のペアのみを扱ったが、その他の共感覚的なメタファーについても WP としての用例が見られるか、あるとすればどのような性質を持つものか、十分な数の例を集めた上でいずれ考察したいと考える。

3.3. メタファーの置換説とワードペア

(10) the whiche is *hanging* and *not fully declarid* there (Cloud, 2470)

(11) Thiself arte *clensid* and *maad vertewos* by no werk so mochel (Cloud, 284-285)

これらの表現では、メタファーと「字義通りの表現」とが並置されていると考えられる。(10)は、導管メタファー (conduit metaphor) の一種であると分析することも可能であろう。ここでは伝えるべき内容が十分に語られていないために、相手に届かず宙に浮いてしまっている¹。(11)では *clensid* (cleansed) がポイントであるが、*OED* (Online) などによると、古英語から用いられている *cleanse* は、日常的な「汚れを落とす」という意味から、次第に「罪の浄化」などの比喩的・転用的な意味へと意味変化したとされている。中英語の時代は、おそらくその途上にあると推測され、ここでは「徳」という宗教的な意味でより直接的な語を用いた表現とペアになっていると考えられる。

こうしたペアは、メタファー表現を言い換えているようでもあり、一見「メタファーの置換説²」すなわちメタファーは別の字義通りの表現と対応するという説を支持しているように見える。しかし、これらのペアにおいては、メタファーは1語であるのに対して、字義通りの表現は2語以上となっている。

1 Reddyの分類に従えば「E. Implying that, particularly when communications are recorded or delivered in public, speakers and writers eject their repertoire members into an external “space.”」(p.194)にあたるものか。

2 または代入説、代置理論などと呼ばれる。これらの用語および説明は松本(2003)、瀬戸(1997)などを参考にしている。

すなわち、メタファーを説明的に言い換えることはできるが、1語の代替語はないことが示されている。

WPを「作る」という観点に立つならば、「1語-1語」のペアが成り立つことが形式としては望ましいであろう。しかし、ここにはメタファーに対応するはずの字義通りの語が存在していない。これは、瀬戸(1995)が言う「対象Aにそれを文字通りに言い表す名称Aが欠けていることがしばしばある」(p. 4)といった状況であり、それゆえに、1語のメタファーと2語以上の表現とを組み合わせるといふ、「ワードペア」としてはやや例外的な結果に至っているのではないだろうか。

なお、逆に「字義通りの表現」が1語で、メタファーに基づくと考えられる表現が2語以上となる例もある。下の(12)では、「軽蔑する」が、メタファー的な「少ししか、あるいは何も『置かない』』といった表現と並置されている。

(12) *dyspysid and sette at lytil or nought* (Cloud, 1186)

以上のように、1語のメタファーと2語以上の表現からなるWP（あるいはその逆）は、メタファーの置換説では説明できない状況を端的に示すとともに、WPという表現形式がそのようなギャップをいかに埋めているかについて、ある程度の見方を提供するものにもなっていると考えられる。

3.4. メタファーにおけるプロファイルとワードペア

(13) *so beastly and so rudely* (Cloud, 1594-1595)

(14) *bodily and beastly* (Cloud, 1624)

beast「獣」をメタファーとして使うことはよくあることだが、ここでWPとして用いられている表現については、(13)と(14)ではペアの相手が異なっている点に着目すべきである。前者はrudely「激しさ、荒々しさ」と、後者はbodily「(精神と対比される)肉体」と組み合わせられている。このことは、beastを用いたそれぞれのメタファーが、獣が持つ諸性質のどこをプロファイルしているか、どのようなプロトタイプ（あるいはステレオタイプ）に基づくかの違いを明示的に示していると考えられる。

同様のペアとしては、childのプロトタイプ（あるいはステレオタイプ）に基づく以下の例を挙げることができる。前者では「真剣ではない、遊び半分」にあたる部分がプロファイルされているのに対し、後者では「愚かさ、無学さ」にあたる部分がプロファイルされていると考えられる。

(15) This is *childly* and *pleyingly* spoken, thee think, paraventure (Cloud, 1636)

(16) Lo! goostly freende, in this werk, thof it be *childly* and *lewdely* spoken (Cloud, 2444)

このように、別の語と並置されることによって生じるプロファイルの表出は、メタファーが単独で用いられた場合にはほとんど考えられないことであろう。本来ならば文脈（あるいは言外）にあるはずのものが、そのフレーズの中に記載されているという点で、WPに見られるメタファーは他所にはない用例を提供するものとなっていると考えられる。

3.5. イメージ・メタファーとワードペア

大堀によると、「汎用的なものとは逆に、慣習化の度合いが低く、感覚（特に視覚）に訴えるものを、イメージ・メタファー（image metaphor）と呼ぶ」（p.85）とあるが、そのようなイメージ・メタファーにあたると考えられる WP の例が *Cloud* には見られる。

(17) This *derknes* and this *cloude* is, howsoever thou dost, bitwix thee and thi God (*Cloud*, 290-291)

(18) With this worde thou schalt bete on this *cloude* and this *derknes* aboven thee (*Cloud*, 506)

「雲」は *The Cloud of Unknowing* のタイトルにも含まれる重要なイメージであるが、ペアの相手である darkness 「暗闇」もまた、この文脈においてはメタファーである。この WP は、イメージ・メタファーの一種として、「雲」と「暗闇」の2つのイメージが用いられたものであると考えられる。一つ一つのメタファーとしてはやや慣習的な面もあり、決して奇抜なものではないが³、組み合わせられることによって独自性が出ていると言うこともできる。

なお、「雲」のイメージを用いた表現としては、以下のような WP も見られる。

(19) in this werk it schal be *casten down* and *keverid with* a cloude of forgetyng (*Cloud*, 460-461)

(19)では“a cloude of forgetyng”自体はペアではない（メタファー的な表現ではある）。そこに、本来は「雲」のみに係る cast down, covered with のペアが結び付けられている。これはおそらく、「雲」のイメージスキーマが、「忘却」を含む目標領域において展開されたもので、これを通じて教義内容の直感的な理解を可能にしていると考えられる。(19)の例は、WPにおけるメタファーといえども決して特殊な性質を有しているのではなく、メタファーが持つとされる諸特徴、ここでは大堀の言う「構造化の力」(p.78)を保っていることを示すものと思われる。

4. むすび

最後に、ここまでの考察を踏まえて、今後 WP とメタファーとを併せた考察を進めることについての展望を述べたいと思う。

新しいメタファー論を用いて WP を研究することは、WP の先行研究の成果を否定するというよりも、むしろそれらに共通の基盤をもたらし、これまであまり言及されることのなかった WP の諸局面を明らかにすることに繋がると考えられる。例えば Koskeniemi (1975) は、MKでは 159 のペアが類義語の意味関係を持つペアであると分類していた。しかし、ここまでの考察を踏まえると、その中の相当数はメタファー的な WP ではなかったかと推測される⁴。一様に「意味の類似に基づく」とされる WP の中にも、メタファーを含む多様な意味関係が存在することが明確になることによって、ステレオタイプ的な見方ではない、実態に基づく WP の記述や分類が可能になるであろう。

さらに、WP とメタファーとの関係を考察することは、メタファーそのものについて考える際にも異

3 自然現象を用いて心的概念を表す WP-メタファーの例としては、*stormes & temptacions* (PC, p. 167 / 117) などを挙げることもできる。

4 *Cloud*では、類義語の WP と考えていたペアのうち、約 1 割程度がメタファーとして分析可能であった。

なる視点を提供するものであると考えられる。メタファー単独の例とは異なり、WPとして用いられたメタファーには、「字義通りの表現」と並置された例や、メタファー的なイメージのどこがプロファイルされているかが明示的に示された例などが含まれていた。WPとメタファーとを併せて考察することは、他所にはないような用例を分析することであり、そこから得られた知見はメタファー論を強化することにも繋がると考えられる。本論文で着手した、認知言語学的観点に基づくWPとメタファーの統合的な研究が、認知言語学やメタファー研究の側への一つの呼び水にもなればと思う次第である。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 25370451 の助成を受けたものです。

参考・参考文献

- 青木繁博「中世英語散文におけるワードペア、フレーズおよび関連表現についての一考察」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第38号(2008)：97-109.
- 一、「*The Cloud of Unknowing*に見られるワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第39号(2009)：81-94.
- 一、「*The Cloud of Unknowing*に見る中世英語ワードペア表現の動機」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第40号(2010)：15-25.
- 一、「マージェリー・ケンプの旅とワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第41号(2011)：107-121.
- 一、「*The Cloud of Unknowing*における同意語以外の組み合わせによるワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第42号(2012)：99-107.
- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.
- 芳賀純、子安増生編『メタファーの心理学』誠信書房、1990.
- Hodgson, Phyllis. *The Cloud of Unknowing and the Book of Privy Counselling*. EETS O.S. 218. London: Oxford UP, 1944, revised reprints, 1958, 1973, reprinted 1981.
- Kay, Christian, et al., eds. *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary*. Oxford University Press, 2009.
- Katami, Akio. "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 第9号(2009)：177-189.
- Kikuchi, Kiyoaki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42 (1995)：1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- 一. "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.
- Lakoff, George and Mark Johnson. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press, 1980. [『レトリックと人生』渡部昇一ほか訳、大修館書店、1986.]
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959)：113-160.
- 松本曜(編著)『認知意味論』大修館書店、2003.
- 松本曜「英語反義語の認知意味論的考察」『神戸言語学論叢』第5号(2007)：125-130.

- 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会、2002.
- Ortony, Andrew, ed. *Metaphor and thought*. 2nd ed. Cambridge University Press, 1993.
- Reddy, Michael. "The Conduit Metaphor." *Metaphor and Thought*. 2nd ed. Ed. Andrew Ortony. Cambridge University Press, 1993. 164–201.
- 瀬戸賢一『メタファー思考：意味と認識のしくみ』講談社、1995.
- 一.『認識のレトリック』海鳴社、1997.
- Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics : A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al., Tokyo : Kenkyusha, 1958. 209–220.
- Shimogasa, Tokuji. "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3 (1997) : 59–74.
- Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style : Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague : Mouton, 1970.
- 谷明信「初期中英語 the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊 (2003) : 19–24.
- 谷口一美『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』研究社、2003.
- Taylor, John R. *Linguistic Categorization*. 3rd ed. Oxford University Press, 2004.
- 渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号) : 285–287.
- Wilson, R. M. "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9 (1956) : 87–112.
- Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号 (1971) : 1–44.
- 山梨正明『比喩と理解』東京大学出版会、1988.
- 安井稔『言外の意味』(新版) 開拓社、2007.

Online Resources

- Historical Thesaurus of the OED. <http://www.oed.com/thesaurus/>
- OED Online. <http://www.oed.com/>
- TEAMS Middle English Texts. <http://d.lib.rochester.edu/teams>
- The Book of Margery Kempe. Lynn Staley, ed.
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe>
- The Cloud of Unknowing. Patrick J. Gallacher, ed.
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/gallacher-the-cloud-of-unknowing>